



正義に憧れるのをやめましょう

理事長・明治大学教授 太田勝造

民事紛争処理の諸制度とその研究のより健全な発展を目的とする本基金の対象範囲を少し超えるかも知れませんが、コロナ・パンデミック後の世界はロシアのウクライナ侵攻やイスラエルとハマスの戦争など対立と紛争が激しく起きています。そのような紛争での敵も味方も異口同音に叫ぶのは「正義」という言葉です。自国民保護という正義のための侵攻、侵略に対する領土回復という正義のための反撃、占領と抑圧に対する正義のための攻撃、テロに対する反撃という正義のための戦争、自国大使館攻撃に対する国際法による正義のためのミサイル攻撃、ミサイル攻撃に対する自国防衛という正義のための反撃、などなど、どこまで行っても「正義」がもたらしているのは、攻撃の応酬と紛争の激化です。

このような「正義」に塗れた世界に住んでいると、与謝野鉄幹の「血写歌」の一節が頭から離れなくなってしまいそうです。鉄幹いわく：

「正義とは／悪魔が被る仮面にて／功名は／死をよろこばず魔術かな」…

「骨を積んで／花はかをる金殿玉楼／血を塗って／星はかゞやく勲章宝綬／あゝ百千の罪悪を／そこに一部の文明史」…

『忠義には猶かへがたし／あつぱれ手柄したぞ』とは／あゝあゝ人を殺せよと／えせ聖人のをしへかな」

「正義」の名で戦いを鼓舞する国や軍の指導者を須らく「えせ聖人」とであると、鉄幹に倣って看破するところから永続的な和平の可能性が出てくるのかも知れません。「なぜそれが正義なのか？」と問い返す必要がありそうです。「正義の名の裏に隠されている真の狙いは何なのか？」を厳しく追及する必要がありそうです。

いや、しかし、それだけでは足りないでしょう。正義に燃え、えせ聖人を信仰し、闘いに熱狂するのは、闘いで傷つき死んでいく「人々」に他ならないからです。一人ひとりが持つ宿業が紛争と戦争をもたらしていると言えるからです。

そもそも、自己の判断と行動を「正義」によって「正当化」という思考様式自体が自己撞着の循環論法であることに気づく必要があるでしょう。何か「価値があるものごと」の価値を重視し、何か「大切なもの」を大切にするというのと同じ循環論法です。本当の意味で紛争を少なくするには、このような思考様式ないしマインドセット自体から卒業する必要があると思います。ジョン・レノンのリリックのようになります。

「Imagine there's no heaven / It's easy if you try / No hell below us」…

「Imagine there's no countries / It isn't hard to do / Nothing to kill or die for / And no religion too」

民事紛争も「正義への拘泥」や「価値への執着」にその淵源がある点では戦争と同根でしょう。民事紛争の予防と解決のためには和平の場合と同様に「正義への拘泥」と「価値への執着」というマインドセットの問題性に対する自覚と克服を目指す必要がありそうです。